2025年5月発行
茨木御堂
第301号

茨木御堂

真宗大谷派
茨木別院
（輪番　河原　恵）
〒567-0817　茨木市別院町3-31
TEL（072）622-2903
FAX（072）625-9445

南無阿弥陀仏　人と生まれたことの意味をたずねていこう　みんなに願いがかけられている

本堂改修工事

南無阿弥陀仏の回向の恩徳広大不思議にて

（『真宗聖典』第二版　六一六頁）

本堂の足場と素屋根の工事が進んできました。先日、工事現場の人と屋根瓦に触れるところまで上ってきました。本堂の南側や北側の軒の瓦は創建当時のものでした。獅子口瓦には、竹へらで安永六年（一七七七）の年号と、寄進した人の名前が書かれていました。軒の先端の瓦には、「茨木瓦」という文字が記してあり、別院の近くで焼いたものだと分かります。いずれも二五〇年という時を超えて私たちのところに届いたものです。

浄土真宗の教えは、本願力回向によって私たちの願と行が救われ、真実信心を確立し、その慶びを次の世代に伝えることにあると思います。すなわち、私たちに二種の回向を与えて如来の本願のはたらきを知らせ、仏の名号によって如来の本願を生きる者にしてくださるのです。

親鸞聖人がお作りになった正像末和讃の五〇首目には、

南無阿弥陀仏の回向の　恩徳広大不思議にて
往相回向の利益には　還相回向に回入せり

とあります。如来様からいただいた本願念仏には、世を超えた願いと私たちの生活の規範が包まれています。その恩徳は、私たちの生活の良しあしを超える広大不思議なものです。また、その利益（りやく）は、仏のこころをいただいて私自身の生きる意味をいただき、人生の歩みを成就すること（往相回向）と、念仏して往生することの喜びを他の人に伝えていくこと（還相回向）にあると思います。

本堂の瓦に刻まれた文字とその姿を見ていると、茨木別院の本堂を建立された祖先の心や如来の心をいただくことができます。この心に出遇うと、私のような者でも、本堂改修のために力を尽くしたいと思います。この令和の大改修を通して、聞法道場という宝物と本願念仏の教えを次の世代に相続していければと願います。

南無阿弥陀仏　輪番　河原恵

茨木別院関連ホームページ
茨　木　別　院 ➡ ibarakibetsuin.or.jp
いばらき大谷学園 ➡ ibarakibetsuin.or.jp/kids/

真宗教団連合ホームページ
http://www.shin.gr.jp/
真宗教団連合　検索

茨木別院　月行事ご案内

五月

●教如上人ご命日・五日講（同朋会）
・日時　五日（月）午後一時半より　・会場　別院会館
・講師　加藤 恵 師

●本山九日講
・日時　九日（金）午後二時より　・会所　慶徳寺
・講師　茨木別院輪番

●永代経法要　ーお勤めと法話ー
・日時　十九日（月）
午後一時半より午後三時頃まで
・講師　志紀 正機 師（常願寺住職）・会場　別院会館
＊十九日（月）の永代経法要前より
茨木別院門徒会総会を開催します

●親鸞聖人ご命日・二十八日講
・日時　二十八日（水）午後一時半より　・会場　別院会館
・講師　茨木別院輪番

六月

●教如上人ご命日・五日講（同朋会）
・日時　五日（木）午後一時半より　・会場　別院会館
・講師　加藤 恵 師

●親鸞聖人ご命日・婦人会例会
・日時　二十八日（土）午後一時半より　・会場　別院会館
・講師　茨木別院輪番

「永代経」とは

永代経は、亡くなられた大切な方を供養する永代供養としての仏事ととらえられがちですが、永代にわたってお経が読まれ、末永く教えが伝わっていくことを願う法要です。今を生きている私たちには、私たちに先駆けてそのいのちと精一杯向き合い、亡くなっていかれた方からの願いが届けられています。また亡き人をご縁にお釈迦さまの教え［お経］を聞き続けることが願われています。そのような場や機会が永代にわたって相続されていくようにと願われているのが永代経なのです。

〈東本願寺出版　永代経〉

●永代経法要
日時／五月十九日（月）
会場／茨木別院会館
講師／志紀 正機 師〈大阪教区第八組　常願寺住職〉

●門徒会総会
日時／五月十九日（月）永代経法要開始前
会場／茨木別院会館
門徒会総会を開催いたします。茨木別院門徒会の年間事業報告や会計報告を行います。皆様お誘い合わせの上ご参加いただきますようお願い申し上げます。

ご入園・ご進級
おめでとうございます

桜やちゅうりっぷの花に包まれて、入園進級式を迎え、新年度がスタートしました。入園式では真新しい制服にワクワク、ドキドキしながら登園する幼児さんの姿や乳児さんのニコニコとご家族と一緒に園庭を散策する姿に、心和む時間をいただくことができました。進級児のおにいさんおねえさんは、自信に満ちた笑顔で元気に進級式に参加し、お祝いの言葉の代表のお友だちは、堂々とお祝いの気持ちを伝えてくれました。今年の入園式は、天候にも恵まれ園庭で行い、鐘つき堂の前ではお釈迦様のご誕生をお祝いする花まつりも楽しむことができ、とても素敵なひと時でした。

これからしばらくの間は、泣き声も聞こえてきますが、一つ一つの積み重ねを通して園生活に慣れ、お友だちとの関わりを深めて楽しく過ごすことができますよう、また、集団活動での大切な経験を通しての成長を楽しみに、お手伝いしてまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

保育士　毛利 久美子

主任教諭　笹尾 典子

新年度に入り、新入園児も多く、進級しての環境の変化で四月の前半は大きな泣き声とともに一日がスタートしていましたが、少しずつ慣れてきている様子です。

さて、今年度も様々な取り組みや行事を行っていく予定です。保護者の方に参加していただく誕生会を今年度も行います。自分で名前を言うのも子どもたちにとってはドキドキ、わくわくする経験です。温かい目で見守っていただけると嬉しいです。保護者参加はありませんが、七夕まつりやすいか割りなどを一学期に行います。さらに年長組はプラネタリウムや潮干狩り、デイキャンプなど、楽しみな行事が目白押しです。

そして幼児組では食育の一環として各学年で野菜や果物を育てています。毎日水やりを行い、植物の生長を見ながらおしゃべりを楽しみ、出来上がった後は、どのような料理にするかまで実際に体験することで、より食に対して興味を持ってもらいたいです。

楽しい行事になるよう試行錯誤しつつ、今年度も職員一同、子どもたちと向き合いながら全力で保育をしていきます。至らない点もあると思いますが、ご理解ご協力の程よろしくお願い致します。

茨木別院報恩講 十一月十五日 日中法話

「親鸞聖人の法然観」②

講師：山田 恵文 師
（三重教区三重組 安正寺住職）

（前号の続き）

さて、関東の門弟たちは、本当に念仏が救いになるのかどうか、浄土に生まれる手立てなのか、確かめに来ました。親鸞聖人の答えははっきりしています。念仏しかないので、「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとのおおせをかぶりて、信ずるほかに別の子細なきなり」（第二条）と言います。親鸞聖人は私には念仏しかありませんということを言っています。「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」、これは、法然上人のことばです。「よきひと」というのが法然上人のことです。法然上人の教えを受けて、それを信じる以外、私には何もありませんと親鸞聖人は言いました。とにかく念仏せよというのが法然上人の教えであり、これを学んで信じてこれまで生きてきたと言っているのです。

実際に親鸞聖人がこのことばを聞いたのは、二十九歳の時です。法然上人と出会った歳です。その時に念仏の教えを学んで念仏者になりました。そして今これを語っているのがおそらく八〇歳を超えています。それは善鸞事件が背景にあるから言えることです。そこから考えると、この一文は二十九歳の時に学んだ教えを拠りどころとしてこれまで生きてきたという、親鸞聖人の人生を表す大事な文章であるということが分かります。私には念仏しかありませんということです。こういう形で関東の門弟たちの疑問に答えています。

ただ答え方が問題になります。念仏が救いになりますか、念仏したら浄土に生まれることができますか、と問われたらどう答えるでしょうか。念仏を信じている人であれば、そうです、念仏したらいいんですよと答えるのが普通です。質問の相手に、念仏で大丈夫です、浄土に生まれますと答えればいい所を、親鸞聖人はそんな答え方をしていません。私はこうである、私においてはこれしかないという答え方をしています。安心して念仏しなさいとは一切言いません。それはなぜなのでしょうか。この問いがすごく大事なところです。なぜ自分のことしか語らないのかということです。最後にその答えをお話したいと思います。

先ほど親鸞聖人は、私には念仏しかない、法然上人の説いた念仏の教えを信じて生きてきましたと述べていました。その念仏の教えとはどういうものであるのか、その法然上人の教えとはどういう背景を持った教えであるのか、ということを更に語り始めます。

弥陀の本願まことにおわしまさば、釈尊の説教、虚言なるべからず。仏説まことにおわしまさば、善導の御釈、虚言したまうべからず。善導の御釈まことならば、法然のおおせそらごとならんや。法然のおおせまことならば、親鸞がもうすむね、またもって、むなしかるべからずそうろうか。詮ずるところ、愚身の信心におきてはかくのごとし。

『歎異抄』第二条

「弥陀の本願まこと」の「まこと」とは真実の「真」です。阿弥陀の願いが真であられるならば、釈尊の教えが嘘であるはずがありません。釈尊の教えが真であられるならば善導の解釈も嘘のはずがありません、とまず述べています。インドの釈尊は阿弥陀の本願を教えました。それが経典として残っています。その経典の解釈をしたのが中国の善導です。ですので、阿弥陀の本願が真であると、釈尊の教えも、善導の解釈も真であるということです。そして、その善導の解釈に出会って念仏者となったのが法然上人です。ですので、善導の解釈が真であるならば法然上人の教えが嘘でありましょうか、嘘のはずがありません、と述べているのです。最後に、その法然上人の教えが真であるならば、私親鸞が申す話も無駄ではないと言えるでしょうか、と述べています。

このように親鸞聖人は、私は真実の教えの伝統に出会えたのだということを述べているのです。繰り返し「まこと、まこと、まこと」と言っているのは、私は真実の教えに出会えて、その真実の教えを拠りどころにして生きてきましたということを伝えておられるのです。

親鸞聖人に直接念仏を教えて下さったのは法然上人です。その教えには深い背景があり、その真実と言うべき教えを私は大切にしてきましたと敢えてここで語っているのです。なぜこのような話をするのかと言うと、私は法然上人をたよりにしているのではなく、法然上人が説いた教えをたよりにしているということを言いたいからなのです。なぜかと言うと、関東の門弟たちは、念仏の教えが本当に救いになるのかどうか疑いを持って来ているわけです。みんなそもそも親鸞聖人の念仏の

教えを学んだ念仏者です。南無阿弥陀仏と称える念仏者になったけれども、善鸞のことばや日蓮の批判によって信心が揺らいでしまったわけです。信仰が揺らいだので親鸞聖人のもとへ行って確かめに来ました。念仏が救いになるのかどうか、と。そこにある思いというのは、親鸞聖人が大丈夫だと言ってくれれば安心できるということなのでしょう。つまり、親鸞聖人に保証を求めに来ているわけです。あの人が言うことなら信じよう、と。そうであるなら、それは教えを納得して信じているのではなく、その人をたよりにしていることになります。

仏教には「法に依りて人に依らざれ」という仏教者が忘れてはならない戒めの言葉があります。法とは教えのことです。教えに依るべきであって人に依ってはいけませんという意味です。教えは、人との出会いによって得られるものです。人を通して教えに出会うことができると言えるのですが、たよりにすべきは説かれた教えであって説く人ではないということです。これは私たちもよく考えなければいけないことです。あの先生が言ったことだから正しいだろうと思ってしまいませんか。人で判断してしまうという問題が私たちにはあります。関東の門弟は、あの親鸞聖人が大丈夫と言ってくれたら安心できると思っているわけです。親鸞聖人はその関東の門弟たちの心根というものが分かったのでしょう。この人たちは私をたよりとして来ているのだと。ですので親鸞聖人は自分のことしか語りません。私はこうである、私はこうである、と。私は法然上人の教えを信じてきたのです、と自分の信心のみ語っているのです。もし、念仏で大丈夫ですよと言ったら、きっと門弟たちは安心したと思います。しかし、それは本当に自分で信じたことにはならなくて、親鸞聖人を根拠にしていることになります。そんな状態で関東に戻ったらどうなるでしょう。誰かに何かを言われれば、また動揺してしまうかもしれません。このように門弟たちのことを案じて、依るべきは教えであり、人をたよりにしてはいけないということから、このような語りになっているのだと思います。

最後に次のように述べています。「このうえは、念仏をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからいなり」（『歎異抄』第二条）。念仏を信じるのも、また念仏を捨てるのもあなた方次第なのです、と。一見すると突き放しているかのような冷たい印象を受けますが、それは表面的な受け止めと私は思います。決して親鸞聖人は突き放しているわけではなく、本当に関東の門弟たちのことを心配しているのです。真の信

心を得てほしいと願っているからこのような言葉が出てくるのです。念仏でいいですよ、安心していいですよと親鸞聖人が言わなかったのは、安易な答えならば、また動揺する、信心が揺らいでしまうということを心配しているからです。真の信心を得て欲しいという願いから、どうか一人ひとりが念仏者として独立してほしいという願いから、こういう言葉が残されていると私は思っています。

さて、最後に親鸞聖人が法然上人を讃えた和讃を見てみましょう。全部で二〇首ありますが、その十七番目を見てみます。

阿弥陀如来化してこそ　本師源空としめしけれ
化縁すでにつきぬれば　浄土にかえりたまいにき

『高僧和讃』

阿弥陀如来が化身となって法然上人と示して現れたと謳っています。法然上人は阿弥陀の化身であると讃えているのです。これは親鸞聖人の法然観なのですが、親鸞聖人は法然上人を阿弥陀の化身や、勢至菩薩の化身であると讃えるのです。これは決して単に法然上人はすごい人であると言っているのではなく、法然上人のお仕事を讃えてこのように表現しているのです。法然上人の仕事とは、念仏の教えを日本中に伝えて広めたことです。念仏の教えとは阿弥陀の本願念仏です。阿弥陀の本願の念仏を人々に伝えて下さったことが、法然上人の生涯をかけての仕事でした。その法然上人の果たされた大切な仕事を踏まえて、あの方は、阿弥陀仏に等しい方だ、阿弥陀仏のお仕事をされた方だということから、阿弥陀の化身と讃えているのです。決して不思議な話をしているわけではありません。阿弥陀の仕事をされたことを讃えて、法然上人は阿弥陀の化身であると言っているのです。

これが親鸞聖人の法然観なのです。法然上人は真実の教えを私たちに開いて下さった方であるといただいているのです。真実の法を説いて下さったという側面から、法然上人を阿弥陀の化身と讃えていくのです。親鸞聖人の法然観を尋ねていくにあたっては、この点が非常に大事なところであると思っています。今回、親鸞聖人は法をよりどころにした人であるということを確かめました。そこから親鸞聖人の法然観を尋ねていく必要があると思うことです。

（完）

永代経志納御披露

●願人　河瀬　靖子

右の通りご志納頂きましたことを御披露いたします。

〈別院墓地合祀墓のご案内〉

別院墓地敷地内にて合祀墓を設けております。個別での納骨も可能となっております。

ご利用をお考えの方は一度ご見学下さい。

敬弔

ご生前のご遺徳を偲び、謹んで哀悼の意を表します。（敬称略）

――記――

●法名　誓願院釋尼浄公
俗名　山田　キミ子　九十六歳

●法名　清浄院釋願心
俗名　古川　清次　八十七歳

●法名　徳風院釋尼寶鈴
俗名　菅　玲子　九十七歳

●法名　斉聖院法文
俗名　斎藤　文男　七十二歳

●法名　釋端政
俗名　川東　政男　八十四歳

編集後記

今年の彼岸会は、本堂の改修工事もあり会館での内勤めでありましたが、たくさんの方にお参りいただけました。五月には、講師の先生をお迎えして永代経の法要が勤まります。永代にわたってお釈迦さまの声（お経）をつないでいく大切な法要です。お彼岸に続きたくさんの方のお参りをお待ちしております。

また永代経の日に合わせて茨木別院門徒会総会の開催も予定しております。茨木別院を支えていただいているご門徒のみなさんにとって大事なことなので法要と併せてたくさんの方にご参加いただければと思います。

竹内　明人

―生花・供花・けいこ花―
株式会社　花廣
茨木市大手町一二一-八
☎（〇七二）六二二-二四〇二